

リスト教社会主義の姿勢。リクールはこの姿勢に深く共鳴した。「何らかの経済的議論が、マルクスのなものであれ他のものであれ、理性的に社会主義的アンガジュマンを確立するためには、必要なのである。それは、単なる道徳的なエランとは別の種類のものであるし、そして、隣人愛から直接的に演繹されてくるものではない」。「そうした混同を私は決してしなかったが、それはアンドレ・フィリップのおかげである」。アナルコーサンディカリストのリクールは、「キリスト者であるがゆえに革命者」とプロテスタント知識人小雑誌『エートル』の記事で書き記す。

ドイツ社会民主党でテイリッヒの政治的盟友であったH・ドーマンの社会主義理論から、フィリップを介してリクールは大きな影響を受ける。人民戦線時代に異色を放った『テール・ヌヴェール』誌への加担をリクールは隠すことなく、積極的・情熱的に表明した。かなりの発行部数を誇った同誌の物議を醸した表紙では十字架と、鎌とハンマーが重ね合わされている。ヴァチカンはこの禁書目録に入れる。『テール・ヌヴェール』同人達はそうなることを意図していたように思われる。しかしそこには左翼的ラディカリスムだけではなく、仏国内でのキリスト教宗派対立という要素も同時に見られる。こうした点に、戦間期プロテスタント左翼運動の特色とダブル・バインド的限界とが表れている。

ガブリエル・マルセルにおける

「誠実」と「固執」

小林 敬

本発表は、ガブリエル・マルセルのカトリック思想の中で、彼いわく「存在の超越性と実存の具体性が決して相互排除的ではないことを明示するもの」として重視された「フィデリテ（誠実）」の概念が、単に「形式的に他者への義務に違反しないこと」（も決して彼は軽んじないが、しかしただそれだけ）に尽きるものではない——後者のことを彼は「コンスタンス（原義は例えば民法上の夫婦間の貞節義務や、生物学上の変温動物と異なる恒温動物の生態等を示す語で、哲学的な適訳が見当たらぬため、仮にここでは「固執」と訳す）」と呼ぶ——、との彼の説明に注目し、発表者が近年本学会（及びIAHR東京大会）で述べてきた、彼の「死を超える愛」の思想についての検討や、「我と汝」の思想の（特に、レヴィナス哲学の影響によってか、「汝」という語自体があまり語られなくなった現今における、それだけ尚一層の）重要性についての再検討をも念頭に置きつつ、もって彼の思想における、地上の「汝」たる隣人へのフィデリテと、「絶対の汝」としての神への「フォワ」フィデス「信仰」との関係についての、発表者いわく「前神学的な」表現方法を、改めて眺めようとするものである。